

# 山間地域における1960年代の「へき地教育」の性格

－奈良県十津川村の大字出谷の事例を中心に－

松野哲哉

(奈良教育大学大学院 教科教育専攻 社会科教育専修)

河本大地

(奈良教育大学 社会科教育講座 (地理学))

馬 鵬飛

(奈良教育大学大学院 教科教育専攻 社会科教育専修)

Characteristics of Rural Education in Mountainous Areas 1960's:  
A case study in Detani Area of Totsukawa Village, Nara Prefecture

Tetsuya MATSUNO

(Graduate School of Education, Student, Nara University of Education)

Daichi KOHMOTO

(Department of Geography, Nara University of Education)

Pengfei MA

(Graduate School of Education, Student, Nara University of Education)

**要旨：**本稿は、1960年代の山間地域における「へき地教育」について、奈良県吉野郡十津川村の大字出谷の事例を中心とした調査により、現代的評価をおこなうことを目的とする。玉井（2016）の挙げるへき地小規模校教育の良さを指標とした。本稿で調査した旧十津川村立出谷小学校は、標高約600mの山頂部に位置し、児童は毎日長い時間をかけて山道を上り下りして通学していた。また栄養状態が悪く、学習面のみならず、環境の面でも「遅れた」状態であった。しかし、児童の自然体験は豊かだった。また、授業以外にも教員と子ども、および子ども同士の信頼関係が深いことを示す出来事が多数みられた。例えば、学校で使うための木炭づくりや、水の確保、通学路の整備などである。子どもたちはその生活を通して、リーダーシップや社会性を身につけた。こうした教育を実施するにあたり、保護者のみならず地域社会全体が学校に対し、非常に好意的、協力的であったことがわかる。これにより、教員は一層子どもと向き合う時間を確保でき、深い信頼関係を構築することができたと考えられる。

**キーワード：**へき地教育 Rural education  
小規模校 Small school  
山間地域 Mountainous area  
十津川村 Totsukawa Village

## 1. はじめに

### 1. 1. 研究の背景および目的

現在、「へき地教育」<sup>1</sup>に関する研究は、へき地教育の積極面をとらえ、それを広く浸透させていこうとする流れが大きくなっている。特に、玉井康之ら北海道教育大学が多くの研究成果を発表しており、また全国へき地教育研究連盟や各地のへき地教育連盟等の大会でも毎年多くの実践事例の発表がある。玉井（2016）は、へき地小規模校教育の良さについて次の4つを挙げている。

- ① 教師による子ども理解や教師と子どもの信頼感を高めている点
- ② 子ども間の信頼関係や相互補完力を高めている点

- ③ 少人数であっても社会性を高める学級運営や集団づくりを進めている点
- ④ 複式授業の中で、子ども自身が運営する間接指導や自立型学習を進めている点

このように、「へき地小規模校の基本特性をとらえ、それを『先進面』としてとらえ直すことにより、へき地小規模校の教育活動の良さを、今後の教育活動の可能性としてとらえることができる」ことから、全国の学校が小規模校化する中で、これまでのへき地小規模校教育の経験が汎用的に活きる可能性を指摘している。

全国へき地教育研究連盟（2018）でも、「へき地に教育の原点がある」、「へき地にこれからの教育の展望がある」などとして、自身と誇りをもって教育に当たるよう

呼び掛けている。

また、筆者らの所属する奈良教育大学（以下、本学）では、2018年3月に奈良県へき地教育振興協議会・奈良県教育委員会との三者による連携協定を締結した。これにより本学及びへき地指定校における教育・研究の充実・発展に資することを目指した活動が行われている。さらに同年には、へき地・小規模校の教育について扱う新授業科目「山間地教育入門」<sup>2</sup>が設置された。ここでも、へき地教育の実状を学び、持続可能な社会のあり方を考えるなど積極面が強調された。

しかし、へき地教育に対しては、以前は消極的な見方が強かった。佐野（1965）は「単級学校、複式学級共にその学級経営の困難さと、教員の負担加重は一般に認めるところであり、且つ多くの場合それらはへき地の学校と併存していた」と述べている。

へき地教育に関する問題点が多く示された、1959年の『講座 教育社会学 IXへき地の教育』では、序説において次のように記されている。これは1954年のへき地教育振興法の制定後のことであるが、臼井（1959）は「僻地教育の有つ欠陥障害は、一片の法令を以てして俄かに除去され得るやうなものではなく、僻地が僻地である限り、或度まで免れ難い害悪であるとも見られよう（原文ママ）」と厳しく評価している。このように、1950年代から1960年代にかけてのへき地教育は「遅れた」ものとされ、デメリットが強調されていた。

以上から本稿では、1960年代の奈良県十津川村大字出谷におけるへき地教育の性格を明らかにするとともに、現代的観点から再評価を行う。また、日本は人口減少・少子高齢化が進んでおり、広大なへき地は、日本や世界

の課題先進地域であるといえる。このような地域の教育について今記録しておくことは、今後の地域理解や地域学習等の教材開発に資する。さらに、「へき地」と呼ばれる地域の在り方を教育に注目して検討することにも、十分な意義がある。

本研究で扱う学校は、十津川村大字出谷に存在した出谷（でたに）小学校（以後「旧出谷小」。1875～1969年。ただし同校に1947～1964年に併設されていた第六中学校出谷分校を含む）である。ただし関連して、西隣の大字上湯川にあった上湯川（かみゆのかわ）小学校（以後「旧上湯川小」。1875～1969年）、旧出谷小と旧上湯川小の統合により大字出谷に設置された西川第二（にしがわだいに）小学校（以後「旧西川第二小」。1969～2017年）、西川第一小学校（以後「旧西川第一小」）・旧西川第二小・旧平谷（ひらたに）小学校（以後「旧平谷小」）の統合により大字平谷に設置された十津川第二小学校（以後「十津川第二小」。2017年～）についても若干扱う。いずれも、1890年の十津川村成立以降は十津川村立の学校である。

## 1. 2. 研究の方法

本研究では、文献調査、聞き取りや現地の踏査などのフィールドワークを行い、その後に内容を再評価した。

まず、文献調査ではへき地教育に関する書籍、論文を収集し、全国的なへき地教育研究の動向を把握した。また、十津川村の教育・行政の動向を把握するため、各学校の沿革・学校統廃合を示す資料や、調査地域の学校経営案や学校要覧、閉校記念誌を調べた。



図1 調査地域全図  
(国土地理院の基盤地図情報を用いて馬作成)

現地調査は、2018 年の 5 月と 7 月、11 月の 3 回に分けて実施した。5 月には旧出谷小の校地跡と通学路を踏査し、また十津川第二小を訪問した。7 月には、旧西川第二小を、11 月には旧上湯川小と旧西川第二小を訪問した。

聞き取り調査の対象は、現職の教員（十津川第二小の校長等）や元教員（旧西川第二小、旧出谷小）、卒業生（村議会議員・大字出谷総代・旅館経営者など）である。

特に、旧出谷小での教育内容については、主に、元教員である飯田稔（いいだ ゐのる）氏、鎌倉勝（かまくら まさる）氏に聞き取りを行った。なお、鎌倉氏は旧西川第二小の元校長でもある。現行の十津川第二小については中西康廣（なかにし やすひろ）校長（2018 年現在）に聞き取りを行った。旧出谷小での生活や、通学路等については、下出谷に在住の中陽（なか あきら）氏、大字出谷総代の大谷岩朗（おおたに いわお）氏、村議会議員の千葉浩一（ちば こういち）氏を中心に聞き取り調査を行った。校舎や学校設備については、中氏や大字上湯川に在住している千葉黎子（ちば れいこ）氏と前岡さよ子（まえおか さよこ）氏を中心に聞き取り調査を行った。なお、元教員と中西校長以外は、全員が旧出谷小の卒業生である。

続いて、1960 年代の事例に対する現代的評価をおこなう。その際、玉井が挙げたへき地小規模校教育のもつ 4 つの良さ、すなわち、①教師による子ども理解や教師と子どもの信頼感を高めている点、②子ども間の信頼関係や相互補完力を高めている点、③少人数であっても社会性を高める学級運営や集団づくりを進めている点、④複式授業の中で、子ども自身が運営する間接指導や自立型学習を進めている点、を指標とする。④について玉井（2016）は「複式学級の中で」としている。しかし、本稿で取り上げる出谷小学校では「十津川学校史」（十津川村教育委員会編、1975）によると 1965 年に複式学級が解消されている。そのため、複式学級であるかどうかにはとらわれずに評価したい。4 つの良さに当てはまらない特徴も出る場合には、別に述べることにする。

なお、取り扱う旧出谷小等の卒業生や元教員は高齢化が進んでおり、今後の調査、特に聞き取りは困難になることが予想される。そのため、本稿では聞き取った内容の記録にも価値があると考え、可能な限り掲載することにした。

## 2. 調査地域の概要

### 2. 1. 十津川村大字出谷について

本研究で対象とするのは、奈良県十津川村の大字出谷である。十津川村は、奈良県の最南端に位置し、面積は県の約 5 分の 1（約 670km<sup>2</sup>）を有する。人口は、3,306（2019 年 1 月 1 日現在）であり、1960 年代から下降の一途をたどっている。年齢階層別の人口では、男性は 60 歳代の割合が最大で、女性は 80～85 歳が最多であり、高齢化が著しく進んでいるといえる。主な産業として、

土木建設業、林業と、十津川温泉郷（十津川温泉・上湯温泉・湯泉地温泉）等を活用した観光業が挙げられる。十津川村には、55 の大字があり、多いところでは 200 人以上が生活しているが、反対に、7 人や 9 人というところや、中には 1 人も住んでおらず機能していない大字も存在する。

その中の大字出谷は、十津川村に位置し、面積は約 27km<sup>2</sup>、世帯数 60、人口は 131 で、十津川村の大字の中では比較的人口が多い。しかし、集落は急峻な地形の山間地に散在している。大字出谷の北部の集落群は、松柱（まつばしら）と総称される。ここは熊野川（十津川）の支流である西川に注ぐ松柱川の流域に、中番、日浦、峯地などの集落が散在している。中・南部は、西川の支流である上湯川（かみゆかわ）が西隣の大字上湯川（かみゆのかわ）から東流する。それに近い斜面に、小原、小壁、下出谷、殿井などの集落が散在している。大字出谷には、明確に中心集落と言える箇所はない。

大字出谷の児童は、旧出谷小が存在していた時期はすべてそこに徒歩で通っていたが、同校の廃校後は同じ大字出谷の中でも中・南部は上湯川筋を学校区とする旧西川第二小に、松柱と呼ばれる北部は西川筋を学校区とする旧西川第一小に分離して通う形となった。これは、従来の徒歩道のネットワークが尾根筋を中心としたものであったのに対し、自動車の通行できる道路が谷筋を中心に建設されたため、自動車ではいったん大字出谷の外に出ないと中・南部と北部との間を移動できないことによる。

### 2. 2. 研究対象の学校について

本研究の対象とするのは、主に旧出谷小である。そのほか、参考として、旧西川第二小、十津川第二小なども若干とりあげる。

旧出谷小（1875～1969 年）は、大字出谷の錨（いかり）集落の尾根上に開校した。同校は、戦前期には青年学校、1947 年から 1964 年にかけては第六中学校の出谷分校が併置されるなど、小学校以外の教育的機能も果たしていた。

旧西川第二小（1969～2017 年）は大字出谷の南部の殿井地区に設置された。旧西川第一小（1964～2017 年）、旧平谷小（1970～2017 年）と統合され、十津川第二小が設置されるまでの 47 年間、教育を担った。旧西川第二小の沿革史（西川第二小学校、2017）によると、開校と同時期に自動車の通行できる道路が整備されたため、大字上湯川と小原、下出谷からの児童はバス通学に移行した。

十津川第二小は 2017 年に大字平谷に設置された、村内で最も新しい小学校である。旧平谷小は十津川第二小建設のため大字折立の折立中学校跡地に 2012 年 9 月に移転したが、その同年 8 月までの校地に敷地かさ上げのうえで新築された。大字平谷以外の児童（およそ 78%）はすべてバスで通学するほどその校区は広く、十津川村のほぼ南半分を占める。



### 3. 旧出谷小等をめぐる状況と教育の性格

#### 3. 1. 学校の概要

旧出谷小は、大字出谷字錨の山頂部、標高 600m に位置している。1875（明治 8）年、殿井学校と中番学校（両校とも開校年不明）が統合され設置された。

前述のように、1947（昭和 22）年から 1964（昭和 39）年までの 17 年間、第六中学校出谷分校を旧出谷小内に併置していた。この時期の学校について、「十津川学校史」によると運営は「学区負担」となっていた。それは、学校の運営費用を保護者などの地域が負担するということである。地域社会にとっては、まさに「地域の学校」であり、学校と地域社会との距離の近さがわかる。

「十津川学校史」によると、制度上、校長は第六中学校本校の校長であったが、事実上は旧出谷小の校長が兼任していた。第六中学校は西川中学校（1964～2012 年）に統合され、小学校は 1969（昭和 44）年 4 月に、旧上湯川小と統合された。しかし、初年度は名目統合とされ、「出谷校舎」として利用された。そして翌 1970 年に旧西川第二小の校舎が落成し、実質統合され廃校となった。

前述したが、峯地や中番、日浦などの松柱地区については、旧西川第二小の反対側の谷に位置し通学が困難なため、1964 年に開校した旧西川第一小の校区となった。

児童・生徒数は、1961 年は小学校が 90 名、中学校が 38 名、計 128 名であった（1961 年度学校経営案より）。1 学年あたり 15 名前後の、小規模な学校といえる。

次は旧出谷小（第六中学校出谷分校含む）の校歌についてである。同校は、学校要覧が現存せず、校歌の掲載された史料が発見されていなかったが、大谷氏が、複数の卒業生に確認したことにより復元された。よって、表 1 に示しておく。飯田氏によると、作曲者は不明であるが、作詞者は、十津川村出身の野長瀬正夫氏（1906～84）であるとわかった。しかし制定年度は判然としない。

表 1 出谷小学校歌

一、教えの露に 生い立ちて	三、祖先の美風 身に受けて
心も身をも 伸ばしつつ	剛健我を 玉となし
日に新たなり 我が力	智恵は出谷の 水と澄む
二、意気は聳ゆる 中 峯の	
まなびや よも	
学 舎高く 四方を見て	
清き理想に 励 学む	

#### 3. 2. 校区及び通学

まず、旧出谷小の校区について述べる。1966 年度の旧出谷小の「学校経営案（以下 1966 年度経営案）」の記述やその中の「出谷小学校近在略図」より、尾根上にある学校の付近には、民家がなく孤立していることがよくわかる。1966 年度経営案では、病院、商店へは 10km、役

場や村教育委員会へは 20km であると記録されている。もちろん、自動車が通れるような道はないため徒歩で遠く離れた商業施設や官公署へ行かねばならない。

また、旧出谷小は尾根上に建てられており、集落の多くは山を下ったところにある。校区内には、峯地、中番、日浦、若山、迫野（せいの）、小壁、殿井、小松辿（こまつたわ）、下出谷の計 9 集落があった。通学する児童のいる家族の数は合わせて 85 世帯であった。ちなみに、当時の大字出谷の総世帯数は 91 世帯であったので、そのうちの 9 割以上に子どもがいたことになる。

通学する児童のいる家族のある集落の規模は様々であり、殿井では 21 世帯であるのに対して、小松辿ではわずかに 1 世帯であった。

通学路については、ほとんどが山道であったため、自動車の走行は不可能である。その長さは、1966 年度経営案によると、集落からの平均距離は 5km で、最遠は 8km であったとあり、非常に通学路が長く、その上急坂悪路であった。ちなみに、一部では自転車の走行が可能であったところも存在する。これについては後述する。

図 2 は、通学路のうちの一つである、下出谷から旧出谷小へ至るルートを地図上に示したものである。およそ 3km であるが、下出谷周辺の高低差は大きい（図 3）。



図 2 下出谷～旧出谷小  
(地理院地図より松野作成)

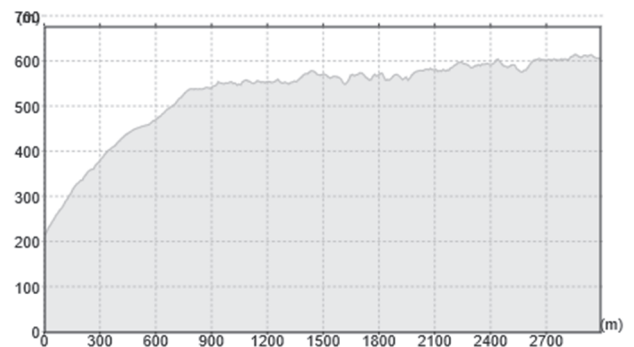


図 3 下出谷～旧出谷小の断面図  
(地理院地図より松野作成)

筆者らは、卒業生である中陽氏とともにこの通学路を踏査した(写真1)。倒木や落ち葉が多く、大変滑りやすい状態であった。



写真1 下出谷からの通学路を歩く  
(2018年5月12日松野撮影)

図3で、この通学路の地形断面を見ると、およそ750～800m進んだ地点から、標高がほとんど一定であることが分かる。これは、山の尾根筋を通る「龍神街道」に入ったためである。この道は山の尾根筋を利用して、和歌山県龍神村(現田辺市龍神村)へと至る。現在は谷部に県道735号線が整備され、ほとんどの人がそちらを利用するが、当時はこの龍神街道こそが往来の活発な道として使われていたのである。そのため、比較的歩きやすい箇所であった。中氏によると当時の小学生で1時間半かけて通学していたという。

雨天や冬季にはさらに危険度が増した。1966年度経営案では、「冬期寒冷で強風吹きすさび、2か月以上根雪のある」状況であったと記録されている。中氏によると、日によっては小学生の膝の高さまで雪があることもあった。また、大谷氏によると、学校の北東の通学路に「クエ」または「グエ」と呼ばれる、崖崩れや落石の起きやすい箇所があった。そこで多雪期には、児童は途中まで保護者と登校することもあったという。

1966年度経営案では、通学中に起こりうる事故として、次の3点を挙げている。「(1) 崖から落ちる。(2) 毒蛇にかまれる・毒虫にさされる。(3) 冬季雪の為、すべったり、積雪の為往来困難となる」。実際、通学路には崖があり、川を渡らなければならないところもある。当然、その危険性は指摘されていた。そして、事故をなるべく防止するため登下校は通学分団ごとに団体行動をとらせるようにしていた。ただし、鎌倉氏によると常時集団登下校が行われていたわけではなかったようである。

写真1の通学路は、旧出谷小の廃校と林業従事者の減少などでほとんど使用されなくなり、現在では倒木などで通行しにくくなっているが、当時は、通学路の維持の

ため、一定の時期になると集落の家庭が中心となって、掃除等の整備活動が積極的に行われた。また、松柱地区の日浦などでは、当時の中学生が中心となり、月に一回程度、通学路を整備する日を定め、子ども自身の手で通学路の管理を行った。その中心人物であった岡秀勇(おかひでゆ)氏は、家から鎌などを持ち出し、積極的に通学路の整備を行った。このような活動の中で、子どもは自然とリーダーシップやフォロアーシップを学んだといえる。岡氏らの活動以前やそのほかの地域では、保護者や地域社会の協力によって通学路が保たれていた。

中氏や千葉浩一氏らからの情報により、上湯川沿いの迫野から龍神街道へ、二輪車が上ることのできる道が存在したことが分かった。教員が移動用に使い、その様子を見て郵便などの業者、他一般の人々も乗り入れるようになった。但し、常に二輪車が迫野の坂道を行き来していたわけではなく、二輪車の置かれている山頂部まで人が登り、そこから乗っての移動が主であった。

学校で使われていた二輪車は、人やモノの移動を担っただけでなく、千葉氏によると授業時間内にエンジンの分解を子どもに見せるなどの教材としての性格も強かった。子どもが教員の運転する二輪車の後ろに乗ったり、子どもが運転したりすることもあったという。

二輪車の他に、自転車も往来した。龍神街道沿いの集落や平坦な道が続く峯地などからの子どもは自転車通学も行っていた。

そのほかの集落では基本的に徒歩である。特に、果無山脈の小松迫から通学するルートは、一度上湯川まで山を下らなければならず、特にアップダウンの激しい通学路であった。小松迫出身の卒業生を知る中氏や大谷氏、鎌倉氏によると、その通学路は片道4時間もかかるものであり、実際は1週間に1、2回ほどしか学校に来ていなかったようである。その通学路が次の図5・6である。その過酷さが分かる。

このように、非常に悪路で長い距離を児童たちは歩いたが、苦勞をしたのは教員も同じであった。鎌倉氏によると、あまりにも校区を周るのに時間がかかるため、家庭訪問は泊まりで行われたとのことである。迫野には教員が寝泊まりできる施設があり、そこから小松迫や峯地方面へと家庭訪問をしていた。この経験を踏まえ、鎌倉氏は、毎日登校してくる児童には感心したと話した。

通学路には、現在スギやヒノキが多く生えているが、当時はマツが非常に多く、マツタケが山で多く採取できた。そのため、マツタケの相対的価値が低かった。しかし、林業が興隆するにあたり、マツが淘汰されいつの間にかマツタケは採取できなくなっていく。中氏は、その当時は「林業をすれば金が儲かる」時代であったと話した。現在もスギやヒノキが広く生い茂っているが、林業の衰退により、手入れされず放置されているところも多い。

当時の通学路の思い出について、複数の卒業生が「食



べ物を探した」ということを話した。当時は現在ほど食料がなく、子どもはいつもお腹を空かせた状態であった。そして、通学途中に様々なものを、道から外れたところに行ったり、木に登ったりして取って食べたと話した。

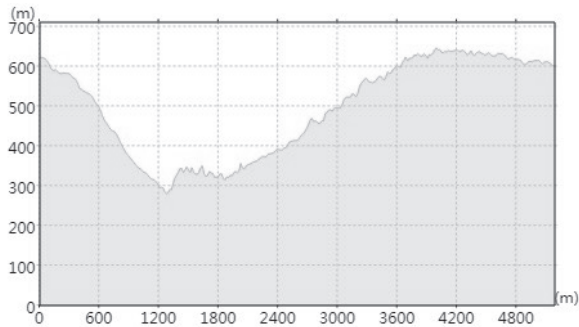


図5 小松辿～旧出谷小の断面図  
(地理院地図より松野作成)

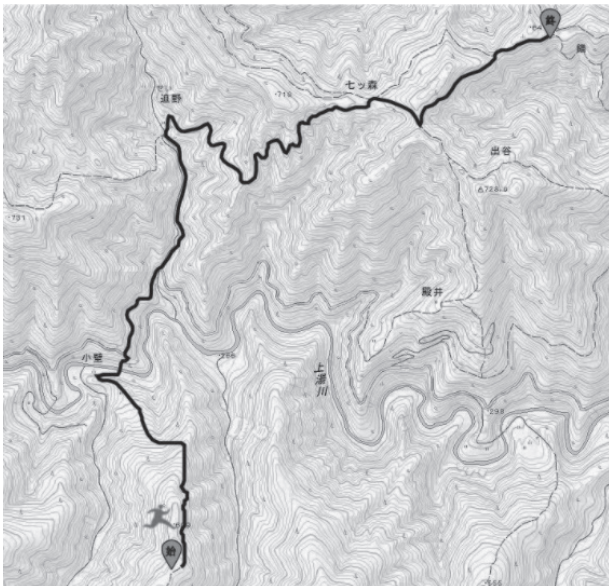


図6 小松辿～旧出谷小  
(地理院地図より松野作成)

木の芽、山菜や木の実である、スイスイ (=スイバ) やゴンパチ (=イタドリ)、シャシャンボ、マツイチゴ (=マツグミ)、シブレ (=ガマズミ) などを取って食べた、卒業生の多くが話した。ほかにも、「おかずの木」は「刺激的」な味がするらしいが、詳細は不明である。

### 3. 3. 学校設備等

図7より、旧出谷小は、平屋建ての校舎と運動場、その他倉庫類によって成り立っていることがわかる。

校舎面積は152.5坪(約500m<sup>2</sup>)で、運動場が345坪(約1,140m<sup>2</sup>)、教員住宅用敷地は130坪(約260m<sup>2</sup>)と、合わせて2,000m<sup>2</sup>程である。

なお屋内体育館はなかったため、体育は屋外で行われた。しかし、入学式や卒業式などの式典や、学芸会などの行事は屋内で行われていた。



図7 校舎略図  
(1961年度学校経営案より馬複製)

#### ・校舎

校舎略図は1961年度のものである。ここから、小学校用の普通教室が3つしかないことが分かる。前述したが、村立第六中学校の分校が旧出谷小内に併置されていたためである。小学校の3教室では複式学級での指導が行われていたことがわかる。

校舎略図はこのようになっているが、実際の使用については異なっていたこともあった。例えば、最も西にあった「中3教室」は「裁縫室」としても使われていた。また、同室には、1960年代半ば頃にテレビが設置され、教員と子どもと一緒にオリンピック中継などを見ることもあった。旧出谷小は地域の文化の中心地となっていたといえる。

他には、中学用教室の壁は取り外すことも可能だった。これによって、教室2つ分の大きなスペースが生まれ、入学式・卒業式等の各種式典や、学芸会などの行事の際にはそのように工夫して使用された。

校舎の東西に1カ所ずつ、合わせて2カ所の児童生使用昇降口が存在した(学校玄関は校舎中央部)。これは、小・中で使い分けがあったのではなく、登校してくる方

角に合わせて使用されていた。校舎内は土足禁止であり、学校生活は内外での二足制であった。

#### ・教室

広さは 17～19 坪で、およそ 60m<sup>2</sup>の大きさであった。机の配置について、複式学級では、左右で学年が分けられていた。一方、単式学級では 3 列の配置など、それぞれ工夫したとみられる。

教室の暖房には薪ストーブが使われていた。使用する際には子どもが持ってきていた弁当も一緒に温めていたと千葉浩一氏は話した。また、たくあんの入った弁当箱を温めると、教室内にたくあんの臭いが充満したと振り返った。

ただし、この薪ストーブが使用され始めたのは 1960 年代後半に入ってからであり、それまでは 1m 四方の火鉢が各教室に設置され使われていた。炭については、近くの山で切り出した木材を使用した。切り出しに際しては、子どもがそれぞれ家からのこぎり等の道具類を持ち寄って行われた。当然道具類を忘れてくることもあり、山の上のほうにある家には子どもが道具を借りに来ることが多くあった。炭焼きについても校内の窯で行われ、これについては教職員が行った。千葉黎子氏と前岡氏によると、当時の中弘視（なか ひろみ）教諭（故人）は、煤で真っ黒になりながら炭を焼いていたと話した。出来上がった炭は校舎東の倉庫に収納され、足りなくなった際には再び炭焼きが行われた。火鉢は暖を取るためだけでなく、小学生の膝ほどの深い雪の中を歩いてきたために濡れてしまった靴下を乾かすためにも使われた。

#### ・運動場

広さは 345 坪（約 1,100m<sup>2</sup>）であり、テニスコート（ダブルス）の 2 倍ほどの大きさだった。ちなみに、現在の小学校設置基準では、第 8 条第 1 項において児童数 240 名以下の場合、2400m<sup>2</sup>以上となっている。なお、現在は同条文で「ただし、地域の実態その他により特別の事情があり、かつ、教育上支障がない場合は、この限りでない」とされているが、それでも旧出谷小の運動場は手狭といえ、広いスペースが必要な遊びや運動は出来なかった。ただし、多くの子どもが登山をしながら通学していたことは事実である。馬場（1959）は「長距離レースやクロス・カンントリーや重量負荷競争などでは、山の子どもは断然強味を発揮する」と指摘している。全身持久力などにおいては、自然と鍛えられていたのではないだろうか。

また、中氏によると、運動場が手狭であったため、野球等をして遊ぶと、よくボールがなくなってしまうとのことである。また、授業内容が球技であったときには、ボールがなくなると授業時間を割いてでもボール探しを行っていたという。運動場にはかつて近くの製材所から出た木の粉を撒いていることもあったが、最終的には保護者等の地域の協力で麓から土が運ばれた。

#### ・教員住宅

写真 2 は旧出谷小の教員住宅を撮影したものである。旧出谷小は山頂に位置しているため車での通勤は不可能であった。そのため、教員が生活するための木造二階建ての住居が用意された。もちろん、全ての教員がここに住んでいたわけではなく、近所であれば通う教員もいた。



写真 2 旧出谷小の教員住宅  
（2018 年 5 月 12 日松野撮影）

鎌倉氏によると、旧出谷小の児童の人数が増えるにつれ、教室が手狭となり、教員住宅の一階部分を改装し、教室として臨時的に使用したことがあったようである。また、現存するのは一棟だけだが、この東隣にもう一棟、そして一段上がったところにもう一棟の、合わせて三棟が設置されていた。写真 2 の住宅は最も古くに建てられたものである。

教員住宅に必要な生活必需品や食料については運び屋によって平谷などから届けられたが、飯田氏によると、保護者からの寄付もあったとのことである。

「十津川学校史」の発行された 1975 年の段階では、へき地教育振興法によって教員住宅の無料化や施設の充実に図られ、教員への待遇をよくすることによって教育環境の充実に図っていた。

校舎はすべて撤去されたが、教員住宅はいまだ朽ちずに現存している。一階部分には足踏み式のミシンなどが残されていた。二階部分には布団などの生活用品の他、1970 年代の中学校の教科書や持ち主の学習の跡の残るノートが大量に残されていた。他にも漫画雑誌や当時人気のアーティストやアイドルの写真、図書類も多数残されており、生活の跡が色濃く残っていた。

#### ・商店

商店が学校の西側、一段低くなったところに存在した。菓子類やノート等の文房具も売っていた。他にも、林業をする人にも使われていたため、そのための商品も置かれていた。

#### ・給食調理施設

商店の隣には給食調理用の小屋が存在した。「十津川学校史」の記述から旧出谷小で給食が始まったのは 1949 年 4 月からである。

しかし当初はミルクのみの「ミルク給食」であった。しかも、翌 1950 年 3 月には、学区の経済事情により「ミルク給食」は中断された。その後、1960 年代に復活し、その頃のメニューはパンと脱脂粉乳であったことが村民らの話から分かっている。このように、給食は実施されていたが、弁当類も持ってきてよいことになっていた。麦飯に削り節をのせ、醤油をかけるような簡単なものの他、イモ類やキビなどの雑穀を弁当として持ってきていた。中氏によると「米の飯の弁当」は裕福な家庭にしかなかったとのことである。当時の栄養状態が今と比べ悪く、子どもは常に空腹であったことがわかる。

中氏は、教員住宅に住む先生に作ってもらったカレーライスの味をはっきり覚えているといい、その当時「こんなうまいもんがあるんか」と感動したという。当時の社会の課題は「栄養状態をよくする」ということだった。その結果として児童は食べ物を求めて山の中を駆け回った。

#### ・水

次は水についてである。学校から龍神街道を西へしばらく進むと木製の水貯めがあり、そこから木製の樋で学校や教員住宅へ流していた。1960 年代半ば頃にはホースに挿げ替えられた。また、教員住宅から少し登ったところに天水田があり、そこから教員住宅や学校の池へ水が流れていた。

このように水が学校へ届くシステムは構築されていたが、不足したり、まったく流れなくなったりすることもあった。その際には、児童が山を下り、上湯川などの川から水を汲んできた。また、冬場にはホース内で水が凍ってしまうことがあり、教員が総出でホースをゆすって水を流そうとすることがあった。鎌倉氏によると、その時に、児童が自発的に手伝うこともあったという。授業時間を削って行われたが、水は重要な問題であった。中氏は授業が減るからうれしかったと話し、鎌倉氏は、「教師の思いと児童の思いが一緒になったようでうれしかった」と話した。

### 3. 4. 教育実践

1966 年度経営案からは、当時の十津川村全体の教育の努力目標がわかる。以下の 3 点である。

- (1) 基礎学力の充実（特に算数科に重点を置いて）
- (2) 道徳教育の振興（生活指導面にも力を注ぐ）
- (3) 学校管理の徹底（人事面は勿論であるが、予算使用の計画等についても充分なる考慮をほらう）

これを踏まえ、旧出谷小の経営方針が以下のように定められた。

「明かるく（原文ママ）楽しい学校に・民主的な学校

に・秩序正しい学校に・研究的な学校に」

この中で、大人が子どもにとって「怖い存在であってはいらない」と述べられており、教員と子どもの信頼関係を築くよう努められていたことがわかる。ただ、この書類の中からは「子ども同士の信頼関係」を構築するというような記述は見られなかった。

ここからは、指導についての一例を述べる。

旧出谷小でも、当然のことながら当時の教員の研究主題が毎年決められていた。例えば、鎌倉氏であれば、算数科において「能力差に応ずる指導」を研究主題としていた。

鎌倉氏はそれについて、理解が遅くなってしまう児童に対しては別の課題を与えることもあったと話した。氏は、当時の児童の理解に差が生まれた原因として通学時間の長さを指摘している。特に小松迫からの児童は通学時間が非常に長く、1 週間に 2、3 日しか登校できない状態であったため、一斉指導の場面では、その児童が中心になるように発問等の授業構成をするよう工夫したと話した。

また、氏は「自分で考えて、自分で行動する子ども」の育成という課題意識をもって指導に当たっていた。そのため、指導にあたっては教員からの一方的なものにならないよう、「こうしたらよいのではないか」と提案したり、考えさせたりして、主体性を育成できるよう心掛けたと話した。

次は授業研究についてである。飯田氏は、十津川村内で授業研究などの研修が盛んに行われたと話した。これらのことから、学校を越えた活発な教員間の交流がわかる。これを実施するためには、少ない教員数（1966 年は 6 名）をさらに減らし仕事を進める必要があった。このことから、飯田氏は、旧出谷小の教員組織は堅固なものであったと振り返った。

教育内容としては、系統的な郷土学習はなかったが、自然を生かした教育がなされた。その 1 つが、「マツタケの観察」（中氏談）である。設備こそ不十分であったが、教材は山の中にいくらでもあった。その中に飛び込んでいく児童は、自然と自立型学習力をつけていったといえる。

また、1966 年度経営案には、「少人数学級の特徴を生かして、個別指導を徹底する」とあり、旧出谷小では個への対応を重視することができたことがわかる。きめ細かな指導が、子どもの自立型学習力の獲得の一助になったのかもしれない。

### 3. 5. 現在の様子

現在の旧出谷小跡には十津川村教育委員会による石碑が建てられており、学校施設は、池と教員住宅を残すのみである。校舎については閉校して間もなく解体された。解体の際、旧出谷小内にあったピアノ<sup>3</sup>が運び出され、旧西川第二小体育館へと移された。その際、ピアノはワ



イヤーで、南の小原集落へ下ろされた。これを担ったのは、保護者等の地域社会であった。校舎の木材はもともと再利用される予定で、しばらく放置されていたが、結局、再利用されずに廃棄されたという。

#### 4. 旧出谷小等の教育に対する現代的評価

ここまで、旧出谷小等を取り巻く環境や教育実践について述べてきた。その内容を、前掲の玉井論文に示された指標を基にまとめたのが表 2 である。

表 2 玉井（2016）より分析した、旧出谷小等を取り巻く環境や教育について積極的に評価できる点

項目	
通学時	子ども達が自ら自然に入り体験、持久力も身に付く…②④
通学路の整備	児童同士、学年を越えた交流…②③
炭焼き、水の確保	学校総出で活動…①②③
教員住宅	教師と、児童やその家庭との交流…①
教育実践	豊富な自然体験や教員の努力…①②③④

子どもたちは通学時などに山菜や木の実などを取って食べるなど、普段から自然に触れていた。この豊かな自然に自ら入っていくこと、これを生かした授業が行われたこと、小規模性を生かした個別指導、教員の工夫や努力によって、④自立型学習力が育っていったと考えられる。自然体験については、千葉浩一氏と中氏はよく通学路で会ったと話していたため、②の子ども間の信頼関係を築くという見方もできる。

通学路の整備においては、岡氏のように、地域の子どもを率いる存在がいたことがわかる。この活動を地域の子どもが手伝ったということから③のリーダーシップや社会性、加えてフォロアーシップも育まれたといえる。

炭焼きや水の確保は学校を挙げて行われるものだった。そのため、児童間や教員と児童の協力は不可欠であった。学習時間はその分減少しているが、①②③の力が付いたと評価できる。教員住宅での交流も、教員と児童の信頼関係を築く大切なものであり、またその関係を維持するよう教員が務め、教育活動を行った。その教材は、学校の周りにある自然そのものであった。

ここまで、玉井の挙げた 4 つの点から旧出谷小をとりまく環境について検討してきた。ただし、その範疇にとどまらない特徴もみられた。それは旧出谷小の教育にプラスの影響を与えていた重要なものと考えられる。

具体的には、学校に対して、保護者等の地域社会が非常に好意的、協力的であったことである。本稿では、通学路の整備、食べ物などの融通、ピアノの運搬、などを取り上げてきた。また、保護者からの協力として、鎌倉氏は、新年度の授業で使う教科書の運搬や、新たに赴任する教員の荷物運びなど、また、教材教具のための資金の援助なども進んで行ってくれたと話している。

これらから、教員の負担が減り、教員が一層子どもと向き合う時間を確保できたと考えられる。これが、教員

と子どものより深い信頼関係の構築にもつながったといえよう。

統合先の旧西川第二小では、バス通学の導入などにより自然体験が減少した。第 9 代（1998～2000 年）校長だった鎌倉氏は、「山の中で育つ子だから、周りのものを生かすことのできる子ども」の育成をめざし、「児童の生活と自然を近づける」ということを念頭に、多くの自然体験を取り入れたという。これについては少し後の年代になるが、『平成 28 年度学校要覧』において記述がみられる。例えば、当該年度の研究計画の項目の一つに、「地域の自然・環境の教材化（川・植物・体験学習等）」とある。また、旧西川第二小（2017）によると、多くの体験活動が取り入れられたことがわかる。このように、旧西川第二小では自然や地域に関する実践が多く行われていた。

地域社会も協力的であり『平成 28 年度学校要覧』において、PTA 活動は保護者（正会員）と地域社会（準会員）で運営されていたことが分かる。

十津川第二小でも自然や郷土に関する体験学習を行う点を引継ぎ、体系化を目指している。中西校長の話や『平成 30 年度学校要覧』によると、統合 2 年目の 2018 年度からは、6 月より学校運営協議会を開催し、学校教育に、より地域の声を反映させる形となっているとのことである。今後、始まったばかりのこの学校が、地域とともに、自然とともに、どのように発展していくか注目していきたい。

#### 5. おわりに

本稿の目的は、1960 年代以前の奈良県十津川村大字出谷におけるへき地教育の性格を明らかにするとともに、現代的評価を行うことであった。結果として、通学時や普段の教育実践から、現在よりもはるかに自然体験が豊富であったことが明らかになった。通学路が山道で長時間となったこと、児童の栄養状態が悪く、食べ物を採るためだったことがあげられるが、それでも児童たちは率先して自然の中へ入り、自然に親しんでいた。また、小規模性を生かした個別指導をしていたことも積極的に評価できることである。

教育活動を行う上で重要な、児童同士の信頼関係も、通学路の維持等の活動によって築かれていた。教員と児童の信頼関係も、教員の努力や上記の活動によって築かれていた。このように、自然での体験活動と、信頼関係を軸に、旧出谷小の教育はすすめられた。このことは学校経営案などには載っていないが、玉井（2016）の指標などから積極的に評価できることとして明確化できた。また、玉井の挙げた範疇に留まらないこととして、保護者等の地域社会の協力があり、それによって旧出谷小の教育が支えられていたということも検討の中で明らかにすることができた。

しかし、旧西川第二小で行われ、十津川第二小で系統

的实施が目指されている、郷土学習がほとんど行われておらず、現代からみると不十分であったといえる。自然のみならず、十津川村や出谷に関する歴史・文化に関する授業実践があれば、なおよかっただろう。

飯田氏も鎌倉氏も、「出谷の子どもはいい子ばかりや」と言い、へき地の子どもたちや教育の良さを熱く語った。しかし、紙幅の都合で十分に紹介することができず、また、十分に検討ができていない箇所がある。特に教育実践については、同一年度の鎌倉氏の実践についてしか紹介できていない。さらに、旧出谷小のへき地性は述べることができたが、小規模性については十分でない。当時の授業実践を引き続き調査していきたい。

なお、本論文の脱稿後に十津川村教育委員会から、十津川村歴史民俗資料館にて旧出谷小・旧上湯川小・旧西川第二小に関するさらなる資料が見つかったとの連絡があった。そこには学校沿革誌や卒業者名簿、学籍簿、学事報告、校舎や教員住宅に関する資料などが含まれているが、本稿にはごく一部しか反映できなかった。これらを用いた検討や、他校の教育実践との比較も今後の課題である。旧上湯川小については、簡易な形ではあるが伊藤・河本・馬（2019）として別にまとめたので、あわせて参照されたい。

## 付記

本稿の作成にあたり、十津川村の教育に関わってこれられた多数の皆様にお世話になりました。厚くお礼申し上げます。なお、本稿の内容の多くは、2018年9月23日の日本地理学会2018年秋季学術大会（於：和歌山大学）で発表しました。また、本研究は十津川村史編纂事業の一環として、十津川村教育委員会のご協力を得て実施し、2019年2月3日の十津川村史編さん委員会報告会（於：平谷地区生活改善センター）で発表しました。

## 注

- 1) へき地教育、へき地学校（へき地校）等の用語における「へき地」は「僻地」を指すものであり、一般にマイナスのイメージを喚起させる。そのため本稿の表題には「いわゆる」という意味で括弧を付している。ただし以降では、へき地教育振興法や全国へき地教育研究連盟等の存在を考慮し、また積極的な印象や実態をへき地教育に今後つけていきたいとも考え、括弧なしに「へき地」という語を用いる。
- 2) 2018年度に新設された授業科目「山間地教育入門」は、1泊2日のスタディツアーとその事前・事後学習を通じて、奈良県南部の山間地域とそこでの「へき地教育」の実状を学び、持続可能な社会のあり方を考えるものである。詳細は河本・中澤・板橋（2019）を参照されたい。

- 3) 旧出谷小にピアノが購入されるにあたり、卒業生78名から、合わせて79,412円の寄付を受けたという記録がある。大字出谷にとどまった者のほか、奈良市や曽爾村など県内各地、そして大阪府や兵庫県等の県外からも、中には愛知県や鳥取県などといった、全国各地の卒業生の名前がみられる。当時の学校運営は学区の経済事情に左右されていたとはいえ、ピアノ購入のために全国から寄付が集まるという出来事からは、「母校のために協力したい」という思いがあるとみて間違いない。地域社会のみならず、幅広い地域の人々の協力があり、このことが旧出谷小の教育を支えていたのである。

## 引用文献

- 伊藤拓海・河本大地・馬 鵬飛（2019）、「奈良県吉野郡十津川村大字上湯川にあった小中学校（1875～1970年）に関する調査報告」，奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要，5 pp. 321-326.
- 臼井二尚（1959）、「序説」，講座 教育社会学 第9巻 へき地の教育，東洋館出版社，pp. 1-15.
- 河本大地・中澤静男・板橋孝幸（2019）、「教員養成課程におけるへき地教育入門科目の設置と受講生の評価—奈良教育大学の『山間地教育入門』初年度の事例—」，奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要，5 pp. 79-89.
- 佐野朝男（1967）、「へき地教育研究の方向」，立正大学人文科学研究所年報，pp. 27-31.
- 全国へき地教育研究連盟（2018）第9次長期5か年研究推進計画，全国へき地教育研究連盟事務局.
- 玉井康之（2016）「全国的小規模校化の中でのへき地小規模校教育の積極面と汎用的活用の可能性」，へき地教育研究，70，pp. 1-8.
- 出谷小学校（1961）1961年度学校経営案，出谷小学校.
- 出谷小学校（1966）1966年度学校経営案，出谷小学校.
- 出谷小学校（1954）ピアノ（原文ママ）購入資料 卒業生名簿 出谷校，出谷小学校.
- 十津川第二小学校（2018）平成30年度学校要覧，十津川第二小学校.
- 十津川村教育委員会編（1975）十津川学校史，十津川村教育委員会.
- 西川第二小学校（2017）沿革史，西川第二小学校.
- 西川第二小学校（2017）閉校記念誌 西川第二小学校，西川第二小学校.
- 西川第二小学校（2016）平成28年度学校要覧，西川第二小学校.
- 馬場四郎（1959）「教育環境としてのへき地 1. 山村」，講座 教育社会学 第9巻 へき地の教育，pp. 17-52.
- 文部科学省（2002制定、2007最終改正）学校設置基準，文部科学省.